



## 翻訳 マイ・フレンド・ビンアム

著者	李 春喜
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	3
ページ	73-91
発行年	2002-03
その他のタイトル	My Friend Bingham by Henry James
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/1219">http://hdl.handle.net/10112/1219</a>

# マイ・フレンド・ビンアム

## *My Friend Bingham*

by Henry James

李 春 喜 訳

LEE Haruki

“My Friend Bingham” is one of Henry James’s short stories which was written in an early stage of his career. It is narrated by the first person narrator, Charles, who is also a character in the story.

Bingham is Charles’s friend. They meet again after a long period of separation and decide to spend their vacation together at a town near the sea. One day they go out hunting. When Bingham tries to shoot a sea-gull, his bullet mistakenly hits a boy, who is near the shore with his widowed mother, Mrs. Hicks. The boy dies. In the aftermath, Bingham falls in love with the woman whose boy he killed and proposes to her. Mrs. Hicks accepts the proposal of marriage, and they get married.

This is a story about a man who falls in love in extraordinarily strange circumstances. He loves a woman whose son he killed, and the woman accepts love from the man who killed her child.

Although this is a story of romance which occurs under the most unrealistic circumstances, since Henry James is the kind of novelist who is always interested in human behaviors which are set in extreme conditions, “My Friend Bingham” is a story which successfully shows Henry James’s unique sentiments as a novelist.

### キーワード

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James)、ビンアム (Bingham)、翻訳 (Translation)

痛ましい物語は避けようとする気持ちが強いので、これからお話する出来事には心痛めるような要素の方が楽しい要素より強いのではないかと繰り返し自問してみた。この問いに対して肯定的な答えを出すと、私の物語は公表しない方がよいということになる。恐ろしい話はすでに多く存在しこれ以上増やす必要はないからだ。しかし、そう答えるつもりはない。だからといって、楽しい要素の方が強いのだといい切れるわけでもない。そこでこの問題は読者にお任せすることにした。事実についての扱い方が表面的であることは十分わかっているし、これらの事実の記述について私は率直な観察者以外の何者でもない。そもそも、この世のいかなる意志を持ってしても、登場人物の心の奥底を推し量ることなど不可能なのだ。しかし、運命という重圧の下では、かすかな情熱の動きにさえ尽きることのない興味が含ま

れているものなので、私はきっと読者の皆さんの共感を得られるものと思っているし、私の物語が事実に忠実であることをお約束したいと思う。

二八歳の夏も終わりの頃、長期にわたる仕事の疲れを癒し、数年来会っていなかった親しい友人と二人きりで旧交を暖めるために私は海辺に来ていた。友人はヨーロッパから帰って来たばかりで、私たちは町からさほど離れていないどこか美しい海辺の町で休暇を一緒に過ごすことにした。宿に到着してすぐに私たちは他に泊まり客がいないことを知り、自分と自分の連れしかいない海辺の静けさを喜んだ。ここで私が本当に素晴らしい友人だと思っている人物について読者に次のような事実を急いで報告しておこう。

ジョージ・ビンアムは、彼が成長するにつれて蔑むようになった人たち、つまり、生まれつき相続する財産が人生の知的な目的や信念を台無しにしてしまうような人たちの家に生まれ育った。これらの事実が原因と結果の関係にあることを彼は私に念を押した。ビンアムの両親の無知と虚栄心について私は比喩的に語っているのではないし、彼らが生きている間にかなりの財産を作れたことは幸運なことであった。彼らには人間にとって本質的な部分が欠けていたといっても私は良心の呵責を感じないのである。ビンアムは雄弁家ではないし、特におしゃべりというわけでもない。ただ、過去の失われた青春に触れて時々深い憤りを示すだけである。彼がひどく謙遜して自分の未来を語る時、たいてい私はこういったことを読み取るのであるが、その慎ましさの下で、彼は自分の未来にはたとえ他のいかなる悪徳はあるにしても、大人として彼の最初の悩みであった家庭内の不名誉には少なくとも悩まされることのないと考えているようだった。私の友人が強く反発している社会の美点について、もちろんある一定の範囲内においてだが、特にその社会の上機嫌さ——物質的な充足感に伴う家庭内における善意のようなもの——について語るべき点はたくさんあると私は確信している。同様に、単純な知性の持ち主にはこれらの美点は楽しく永続する神秘性を帯びているように見えるだろうが、気の毒なことにビンアムは愚か者ではなかった。彼は精妙で深い意見を数多く持っていた。青春が過ぎ去ると同時に、彼は自分の持つ意見を予感し、初めて世の中に疑いの目を向けたが、彼の住む限られた世界では、彼と彼の意見は悲しいことに見当違いだということに気がついた。二三歳で父親を亡くし、かなりの遺産を手にしたまったく自由に行動できるようになったとき、彼は盲目的に世間に身を投じた。しかし、後に彼が私に認めたように、現実の世界——といっても労働と調査探求の世界——に対する彼の知識は非常に表面的なものにすぎなかったので、自分が知的な行動をまったくとれないことに気がついた。このようにして彼はかなりの時間を無駄に過ごした。しかし彼はよく旅行をした。男性と女性について鋭く観察してきたので、彼は人間の本質についてある種の実験的な知識を身につけた。しかしながら、彼がついに自分自身のために生き始めたとき彼はほとんど三十になろうという年だった。「自分自身とは、何の役にも立たず何も考えずただ親から譲り受けた化け物じみた存在ではない何かなのだ」と彼は説明した。そしてその瞬間、彼は真剣に学

習しようとしていることを私に信じさせた、というより、私がそう信じるにまかせた。しかしこの点についてはあまりはっきりしない。というのも、もし学習する機会を逃したその逃し方について彼が恥じているとしても、同様に彼はそれらの機会を利用したその利用の仕方をも恥じているからである。学習ということに関して彼はほんの限られた能力しか持たないと私は考えているが、空想と現実の非常に親しい関係は生涯彼の思考の中に存在し続けるだろう。

ビンアムはとりわけ道徳的で感傷的な人物だった。彼は自分でもわかっていたと思うが、そういった性質はこのあわただしい西部ではあまり見られるものではない。しかし、それが不在であるからこそ、道徳的で感傷的であるということは彼にとって大変重要なことであった。そしてそれは私にとっても大変重要なものであった。しばしば午前中を長時間仕事に費やした後など、まるで半時間ビンアムと道徳的な議論——お好みならおしゃべりといってもいいのだが——をした後の方が世の中に貢献したように感じたものだ。確かに彼は怠け者だった。しかし彼の率直さ、賢明さ、趣味の良さ、そしてとりわけ、満たされない恋に苦しむ恋人が微妙な警戒心で対象を追うときのある種の控えめな情熱など、多くのことが彼を低俗になることから救っていた。先に触れたように、私たちが再会する前の三年間、彼に対する私の印象は彼からの手紙にもとづいていた。しかし、私たちが一緒に過ごした最初の一時間で私はそれらの年月が彼に不利益をもたらさなかったことを感じた。私たちは本当の友だちだった。次のようにいうこと以上にそのことを適切に示すものがあるだろうか。つまり、私たちの古い個人的な関係がその力を取り戻すにつれて、そして、時の流れの中で薄れた性格の面影が回復されるにつれて、あまり目にするものがない彼の長所を見るのと同じくらい、私はビンアムの例の短所を見るのを心から歓迎したのである。実際、昔の彼と比べると、今の彼は世間によく揉まれたといえる。しかし、彼が身につけた慎ましきや節度のある人の良さにもかかわらず、彼にはある種の精神的なたくなさ、堅苦しさが残っていた。そしてそれは現実的な問題に本気で取り組む必要のない人間が持つ特徴であり特権でもあった。これらの事実がビンアムの会話に魅力をもたらしていた。この魅力は——しばしばそういう事実がないところでも意味なく引き合いに出されるのだが——彼がそれらの事実がもたらす結果にまったく無関心であり、また、それを人の目を引くために利用しようとする気がないためにもたらされるものなのである。それは、外見と家柄に恵まれ、若くて裕福で教養のある男が手に入れるにはさほど難しいものではなかった。批判的な人には次のようにいってもよい。彼の主たる長所は、幸運にも自分の足元にばらまかれたきらびやかなもので自らの身を流行で飾ることを断固として拒否したことである。

もちろん、私たちのおしゃべりの大部分はビンアムの最近の旅行、冒険、恋愛に関するものだった。彼は恋愛の一つについて率直に触れ、恋に落ちた話を少ししてくれた。彼は恋に落ちたが酷い終わり方をした。しかし、今では彼が好きなフランスの批評家のように公平な

目でそのことを見れるようになっていた。その若い女性の性格と動機についての彼の話はまさに新聞の連載小説の恰好の題材となったであろう。しかし、彼の話の内容をたどりながら、その恋愛をあきらめたことによる痕跡——もう少しで惨劇といいそうになったが——を目にしても、私は彼の冷静な口調にあまり驚かなかった。ビンアムは誓って結婚などしないと。私は慌てて、そのような重大な決定を下すには君はまだ若過ぎると彼を説得しようとした。

「仕方ないさ。一人で生きて一人で死ぬような予感がするんだ」

「予感? そんなものにどんな意味があるんだ?」

「それなら合理的に考えて僕の結婚はありえないといってもいいぜ」

「でもそれは合理的に考えられるようなものではなくて感情の領域に関わることなんだ」私は反論した。

「しかし君は僕の感情を否定したじゃないか。僕は自分の予感に頼ることにしたんだ」

「感情じゃない。超自然的なことなんだ。君の結婚は誰かと恋に落ちることにかかっている。そして、恋に落ちるとするのは結局自分ではどうにもならない問題なのさ」と私は答えた。

「それじゃ誰の問題なんだ?」

「誰か知らない美しい人だよ。A嬢とかB嬢とかC嬢とか」

「それじゃあそういう女性に早く姿を現してもらいたいね」と彼は納得したようにいった。

こういったやりとりは海に向かって勾配になっている岩壁の窪みの中で行われた。その草むらの上で私たちは何もすることなく寝そべっていた。草はかなり成長していて茶色がかった。頭の位置が草の先と同じ高さのところであり、目の前の海岸とやさしく崩れ落ちる波が、鬱蒼と茂る草むらに完全にさえぎられていた。私たちの目には草むらの先に横たわる深い青色をたたえた細長い一筋の海と大きな空の広がりが見えるだけだった。私たちはあまり猟に出かけたくなさそうな人なつつこい猟犬とともに、借り物の銃を抱えながら二時間ほど前に出て来たのだった。私たちはどちらも本物のスポーツマンというわけではなかったし、概ね鴨たちには親切な存在だったことはまちがいない。ともかく鴨たちにとってその日はそんなに酷い日に会わされないですむ日だった。先に紹介した会話に先立つ半時間の間、私たちは出かけて来た本来の目的をまったく忘れてしまっていた。銃は草むらの中に放りっぱなしで、連れてきた猟犬はすることがないのにうんざりして合図の声も届かないところまで行ってしまった。私たちは仕事をさぼって暇つぶしをしている人のように何もすることがなかった。ついにビンアムがこのまま手ぶらで帰るわけにはいかないという決意とともに立ち上がった。彼は浜辺を見下ろして叫んだ。「おい、例の建物に泊まっている友人が病気の男の子と一緒にいるぜ」

私は上体を起こして岩壁の下を眺めた。一人の女性が波うち際に座って子どもをあやすために水の中に小石を投げ込んでいた。子どもは夢中になって手をたたいて喜んでいる。彼女を友人と呼んだのは、私たちが海岸に来る途中、病人のように身を包んだ顔色の良くない小さな男の子の手を引いてホテルのそばの建物から彼女が出てくるのを見たからだ。私は今ホテルといったが、宿泊客はほとんどいなくて、この若い女性が私たちの目を引いた最初の宿泊客だった。地味な服装をしていたが、若くてかわいらしくて控え目な女性だった。他に気にかかるような問題もなかったので、彼女を興味深い女性にするにはこれらの事実だけで十分だった。彼女は地元の女性なのかそれとも私たちと同じような滞在者なのかという疑問がビンアムと私の間で持ち上がった。ビンアムは前者だといい、私は後者だといった。確かに彼女の容貌にはある種の身分の低さを感じさせるものがあったが、それは決して品の悪さを感じさせるようなものではないと私は主張した。服装は地味だったが、仕立ての良いもので、その服装の着こなしも上品だった。男の子の手を引いて歩きながら、彼女が空と海をものめずらしそうに眺めているのが気がついた。空と海が隣合わせに存在する風景が見慣れないようだった。彼女は何かちょっとした職人の妻で、医師の指示で子どもを海辺に連れて来ているのだと私は主張した。しかし、ビンアムにとって、彼女が五歳の子の母親だと考えるのはまったく非論理的なことだった。彼にいわせると、彼女の外見はいかにも田舎者らしく、男の子は結婚した姉の子、つまり彼女の甥で、彼女は感傷的な未婚の叔母なのだそうだ。明らかに彼女が手にしているのはテニソンだった。もちろん、どちらの側にも決定的な情報がなかったので議論は長くは続かなかった。そしてその議論の対象は、海岸で彼女に再び出会うまで私たちの記憶の外に出てしまっていた。彼女はすぐに私たちの姿に気がついた。邪魔をしたような気がしたので、私たちはすぐに歩を進めた。後方の視界をさえぎっている岩壁でぐるりと向きを変えたとき、最後に見たのは、急激に迫ってくる波を避けようとして急いで男の子の腕をつかんでいる彼女の姿だった。

それから半時間ほど歩くと、それ以上先には進みたくないところまで来た。二人で六羽ほど鳥を仕留めた。しかし、残念なことに何か他のことに才能がある猟犬は深い水に入ることをためらい、仕留めた獲物を二羽ばかり岸まで運んで来るだけだった。私たちはこれ以上の殺戮はやめることにして、たった今降りてきた海岸に沿って静かに帰途についた。

「もしあの若い女性に会ったら、俺たちの獲物を差し上げるのになあ」とビンアムがいった。

彼がそういった五分後、二羽の大きなかもめが私たちの頭上を陸に向かって飛んで来た。しばらく空中で旋回した後、ほとんど波のところまで突き出た岩壁の斜面に私たちの前方数百ヤードの所で大胆にも舞い降りた。しばらくじっとしていたが、そのうちの一羽が長い翼を広げて舞い上がり海の方へ飛び去った。残された方はそのままじっとしていた。高さ十五フィートほどの突き出た岩にとまって魚色の胸に日差しを受けていた。

「あの鳥を仕留められるかな」とビンアムは言った。

「やってみろよ」と私は答えた。彼が急いで弾を込め狙いを定めているとき、その大きな鳥を見ながら私は漠然と繰り返したことを覚えている。

老いた水夫よ、神があなたを救ってくれますように  
このようにあなたを苦しめる悪鬼から！  
なぜそのような様子をしているのです？「この弓で  
私はアホウドリを撃ったのです」

「飛び立つぞ」私はいった。

しかしビンアムは撃った。その生き物はいくぶん物憂そうに、しかし恐ろしいほどの敏捷さで飛び上がった。ビンアムの銃声とほとんど同時に鳥は飛び上がり私たちは思わず声を上げた。鳥が飛び去って突然何もなくなった場所の向こう側に、私たちが一時間ほど前に別れてきた楽しそうな少年の姿が見えた、といえは銃声の後に起った出来事と私たちの場所の関係を最も正確に表現したことになるだろうか。少年は立って腕を伸ばしながら、顔は飛び去っていく鳥に向けられていた。両手を頭の上に振りかざし、崩れるように視界から消え去る少年を見たときの胸の悪くなるような衝撃も、岩壁を回って、途切れとぎれのなめらかな砂浜を駆けていったときの速さも言葉にすることはできない。

一緒にいた女性は、少年が落ちた岩棚の方へごつごつした岩壁をよじ登っていった。そこまで行くのはそんなに難しいことではなかった。彼女は岩の上に座り込んで、少年の体を激しく抱えた。私はその光景から、それに劣らず悲痛な姿であった私の友人の方へ視線を移した。ビンアムは岩場を跳び越え地面にひざまづいた。その女性は彼が彼女の腕から少年を抱きかかえるままにさせ、額を岩にあて体を折るようになってうめき声を上げた。この偶然の集団によって鮮烈に具体化されたほどの無力感を私は目にしたことがなかった。

「頭に当たったのか？」ビンアムは叫んだ。「彼は一体こんな所で何をしていたんだ？」

「怪我をするよっていったんです」その若い女性は傷ましいほど簡潔にいった。「この子を撃つなんて！この子は殺されたのだわ！」

「何だって！私にこの子が見えたともいうのか！」とビンアムは大声をあげた。「この子がここにいるってどうして私にわかるものか？君には私たちが見えたのか？」

その若い女性は首を振った。「もちろん、見えませんでしたわ。お二人が銃をお持ちなのは少し前にお見かけしましたが。ああ、この子は殺されたのですわ！」

「殺されたのではない。単なる鴨猟だったんだ。そんな言い方はよしてくれ。ああ、何ということだ！」ジョージは叫んだ。「チャールズ、俺たちの目はどこについてたんだ？」

「この子は鳥を捕まえたかったのですわ」とその女性はうなるようにいった。「私のかわいい子！目を開けてちょうだい。お母さんにお話してちょうだい。お願いします、どなたか助けを呼んで下さい！」

彼女は手を伸ばしてビンアムから子どもを受け取ろうとした。ビンアムは半ば怒ったように彼女の手の届かないところに少年を抱き上げた。ビンアムの手から取り上げられ、彼女の腕に抱きかかえられたときの感覚のない動きは、明らかに死んだ者のそれであった。彼女はわっと泣き出した。私は近づいて調べてみた。

「この子は殺されたのではない」ビンアムの方を振りかえりながら私はいった。「しっかりしろ。君のせいではないんだ。お互い相手が見えなかったんだから」

ビンアムは呆然と立ち上がった。

「彼女を送っていかなきゃ」と私はいった。

「馬車を拾わなきゃいけない。君は来るのか、それとも残るのか？」

彼が事態の深刻さに気づいたのがわかった。惨めな無力感を漂わせて自分の周囲を見まわした。「かわいそうに！」彼はかすれた声でいった。

「馬車を探しに行くのか？」彼の手を取りながら私は繰り返した。「それとも残るのか？」

女性の泣き声は激しさを増していた。

「僕は残る。誰か女性を連れて来てくれ」彼はいった。

私は大急ぎで駆けて行った。海岸をあとにして、二人の女性が庭先でうわさ話をしている白い家屋を通り過ぎ、ホテルの厩舎に到着した。そこで運よく自由に使える馬車が見つかり、私はその白い家屋までそれに乗って引き帰した。一人の女性の姿はすでになかったが、鋭い目をした中年のもう一人の女性は彼女が手入れをしている草花の中をぶらぶらとしていた。馬車を降りて慌てて彼女に話しかけたとき、私は、悪い知らせであることが彼女には分っているということを彼女の素早い視線の中に察知した。

「お宅に滞在されている若い女性が……」と私は話し始めた。

「ええ」彼女は答えた。「私のまたいところですが。どうかしましたか？」

「困ったことになったのです。彼女はあなたに来てもらいたがっています。男の子が怪我をしたのです」彼女がヒステリックになる恐れはないことがわかるだけの時間はあった。

「あの子はどこにいるのです？」とその女性は尋ねた。

「海岸です」

「あの子の子がどうしたのです？」

「岩から落ちたのです。時間がありません」

いらいらすると同時に落ち着きもするある種の古風な堅苦しさみたいなものがその女性にはあった。早く話してしまおうという気持ちと彼女の自制心を信頼する気持ちとの両方の気持ちに駆り立てられた。「私が知る限り」私はいった。「お子さんは亡くなったと思います」

彼女は怒ったように私を見つめた。「あなたが知る限りですって！」彼女は声を荒げた。「人が死んでるかどうかもわからなかったというの？それとも怖くて見れなかったとでもいうの？」

「ええ、半分怖かったのかもしれませんが」

欄越しに彼女は馬車を見た。「あれに乗るのですか？」

「そうしていただくと大変有り難いのです」

彼女は急に振り返ると家の中に再び入って行った。私がダリアやナデシコの花の中に立っていると、中から箆笥を急いで開けたり閉めたりする音が聞こえた。間もなく、馬車に乗る服装で再び彼女が現われた。戸締りをして鍵をポケットにしまい、馬車に乗り込むのに手を貸そうと待っている私のところまでやって来た。

「医者に寄って行きましょう」と彼女が話し始めた。

「医者は必要ないと思います」と私はいった。

大急ぎで走ったのですぐに目的地に着いた。私がいけない間にはっきりとわかるほど波は引いていた。低くなった波線のところでポケットに手を入れ海の方を向いて突っ立っている哀れなビンアムの姿を見て、取り返しがつかない事の重大さについて奇妙な印象を受けたのを覚えている。彼女が倒れた岩山の上で、少年の母親は子どもを胸に抱えたまま座っていた。私は同行して来た女性が馬車から降りるのに手を貸した。彼女はとても慎重に馬車から降りた。私たちが海岸沿いを馬車で駈けて来る間、彼女は、ビンアムの姿とビンアムが辛抱強く顔を背けているのを見て、彼と彼のそばにいる親子の間の関係を疑いを持ったに違いない。その若い女性は彼女のまたいところが数歩先まで近づいて来るまで気づかなかった。二人の出会いに背を向けビンアムの方に歩いて行く前に、一瞬若い女性の苦痛に満ちた表情と、年配の女性が深く哀れむようにかがみ込むのが見えただけだった。単調な波の音が車輪の音を掻き消していた。空と海の単純な美しさからいかなる神秘的な救いを引き出そうとしていたのか知る由もないが、彼は私たちが到着したことにはまったく気づいていなかった。彼が振り向く前に私は彼の肩に手を置いた。彼は岩壁の土台の方に目をやった。順序として当然激情が襲って来ることは分っていた。しかし、それまでの間どうすれば彼の力になれるのだろうか？「彼女のいとこなんだ」と私はいつてみた。「とても頼り甲斐のある人のように見えるが」

「子どもは完全に死んでいるよ」これがビンアムの答えたすべてだった。私は何事もなかったかのような彼の話し方に驚いた。様々な考えがあちこちを飛び回っていて、私は彼がその場を離れることができなかったということをおぼえていた。率直な彼の口調が恐ろしい事実を（さしあたり）前向きに受け止めていることを示していたので、彼の判断が私のものよりも適切であることに気づいたのは少し経ってからだった。

「彼女たちは早く家に戻った方がいい」と私はいった。年配の方の女性が同じ様に考えていたことは明らかだった。彼女は少年を抱き上げて馬車の中に運び入れ、母親の方を振り返って馬車に乗るのに手を貸していた。私が立っている場所からさえ、彼女の振る舞いには固い決意と優しさが混在しているのが分った。さらに彼女の振る舞いには——突拍子もないこ

とをいうと、皮肉な要素がないわけではないが——私たちの行動に対する一種の無関心、または、私たちの干渉を必要としない態度が示されているように思えた。どんなに素早く手に入れたにせよ、既に彼女が事情を察していることは明らかだった。「何としっかりした人だ！」私は叫んだ。しかし、これから起きるに違いない事態において、この善良な女性の態度が示し、ビンアムが遭遇せざるを得ない当然の悪感情に、私はビンアムの友人として同じ立場で対処しなければならないという気持ちを抑えることができなかった。

私たちは一緒に馬車の方に歩いて行った。「少し寄り道していくつもりだ」とビンアムは言った。「でも心配しないでくれ」

私は時計を見た。精一杯の友情を示しながら「二時間だけだよ」といった。

新しくやって来た女性は後の席で不幸にあった女性のそばに座っていた。彼女は馬車に乗り込んだときに子どもを再び抱きかかえていた。私が前の席に着こうとしていると、ビンアムがやって来て車輪のそばに立った。私は彼の表情に彼の意図を読み取った。彼は取り返しのつかないことをしてしまったのだが、彼にも普通の人としての気持ちがあり、彼がひどい悪人ではないことを彼女に分って欲しいということだった。彼女の片方の手が、動かなくなった少年の小さな両手と一緒に膝の上に置かれていた。ビンアムは帽子を取り、右手を彼女の右手の上に置いた。彼の手に触れて彼女が驚き、彼が激しく自分の手に力を込めたのが見えた。

「お許しを乞うのは早すぎることは分っています」とビンアムは言った。「あなたにどんなにひどいことをしたのか落ち着いて考えることもできないのですから。神は私たちに何と奇妙な出会いをさせたのでしょうか」

若い女性はうつむいた顔を上げた。その表情は彼が望んでいた通りのものではなかったにせよ、少なくとも彼女の精一杯の思いやりであり、間もなくやって来る未来に彼が立ち向かう力になったと思う。しかし、こういったことはことばにするにはあまりにもデリケートなことだ。

ビンアムが宿に戻って来るまでの時間を、私は、その家屋の住民についての情報を集めて過ごした。女性特有の悲劇に対する鋭い直感に促されて、親切で分別のあるホテルの部屋係はすぐに私の信頼を勝ち取った。私たちの休暇をふっ飛ばした悲惨な事件については、最初のおわさが私自身の口から漏れてもいいと思っていた。人の良いこの女性が示す思いやりがまったく公平無私なものであったことに私は強く感心した。後で知ったのだが、その家屋の主人であるホーナーさんは隣町出身で、立派な由緒ある家庭の最後の一人ということだった。ここ数年、夏の間だけ宿を貸していて、今年のシーズンも終わりに近づいたので、彼女は身内のヒックス夫人を呼び寄せて、彼女と一緒に秋を過ごすつもりだった。ヒックス夫人が三年前に亡くなったバプティスト派の牧師の未亡人であること、彼女がとても貧しいこと、子どもの具合が悪く、その子の世話で彼女が思うように働けないこと、そこで彼女は冬の間

子どもをホーナーさんに預け、彼女は町に勤め口を探すつもりだったこと、これらの事実が、この部屋係の少しばかり長過ぎた説明の主な点だった。

ビンアムが戻って来たとき、早い秋の夕暮れがすでに辺りを覆っていた。彼はとても疲れているように見えた。数時間歩いている間に、新たな自分の責任についてある程度の覚悟ができたようだった。彼はとてもお腹を空かして、夕食をかなり乱暴に食べた。私は何も食べる気がしなかったが、彼の旺盛な食欲を目にして私も何か口にしたくなった。私は考えることにうんざりして、ビンアムの単純で率直な精神状態に何か健全なものを感じた。

「今回のことを僕はとても落ち着いて受け止めているよ」と食事をとりながら彼はいった。「今回の出来事はあまりにも絶対的なことだから受け入れるしかないんだ。もしあの子を不具にしていたらどう耐えることができたかわからないよ。人を死なせてしまうことは、ある意味では、それ以上傷つけることができないということなんだ」彼はじっと私の目を見つめながら正直にこれらのことばを慎重に発言した。しかし、彼のことが途切れたとき、彼の発言の意味にはまったく同意しているにもかかわらず、私の考えは事態の本当に悲劇的な面に向かわざるを得なかった。そして、彼は私の顔つきから私の考えを読み取ったに違いない。彼の青白い顔色は燃えるように真っ赤になり、彼の唇は震えていた。「そうさ！」彼は叫んだ。「どうにもならないんだよ」彼は両手で頭をかかえて泣き出した。

私たちは長い問話をした。話も終わりかけた頃、私たちは煙草に火をつけて人気のない広場に出て来た。星空が綺麗だった。黙ったまま角を二、三曲ると、ビンアムは私の側を離れ、道がカーブしている所を海の方角に歩いて行った。私は彼が長い間じっと立っているのを見ていた。すると、彼が私を呼ぶのが聞こえた。彼の側に行ってみると、彼が白い家屋の窓の明かりを見ていたことがわかった。遠くで村の鐘が九時を打つのが聞こえた。

「チャールズ」とビンアムがいった。「あそこへ行って、何か力になれることがないか尋ねてみてくれないか。あの気の毒な二人は誰を頼ればいいのかわからずにいるんだ。彼女は二人の男と関わることになってしまったわけだし、不幸なことになったけれども、善意はわかってくれるはずだ」

私はしばらくぐずぐずしていた。「難しい仕事だ」と私はいった。「何ていうんだい？」

ビンアムは黙って煙草の煙をふかしていた。彼は腕を組んで立っていた。それから頭を後ろにそらせゆっくりと星空を眺めた。「彼女もここへ来てあの星空を見てくれたらいいのだが」彼はいった。「子どもを亡くした母親の心を癒してくれるにちがいない。どいうわけか」彼は続けた。「こんなに気分が高揚したのは初めてだ。僕のせいじゃない」

「そんなことを彼女にいても何にもならないだろう」と私はいった。

「わからないよ」ビンアムはいった。「社交辞令を交わしている場合でもなかろう。こういえばどうだ。彼女たちはこの一両日中にお葬式をされるはずだ。是非参列させていただきたいと彼女に伝えてくれ」

私は彼女たちの家屋へ向かって行った。婦人が自ら小さな客間に通してくれた。

「何かご用ですか？」感情の無い硬い口調だった。

「何かヒックスさんのお役に立てないかと思ってお伺いしたのですが」と私は答えた。

首を振る彼女の態度には頑ななところはなかった。「どんな役に立てるといえるのです？」彼女は尋ねた。

「男性だからできることがあるかもしれません……」と私はいった。

「ああ、男というのは何とおめでたい人たちでしょう。あの子は私に任せて下さい」

「せめて彼女がどんな具合かだけでも教えていただきたいのですが……少しばかりよくなりましたでしょうか？」

このとき、隣の部屋の戸が開いて、ヒックス夫人がランプを持って部屋の入口に立っていた。美しく傷ましい姿だった。まぎれもなく彼女は美しい女性だった。彼女のブロンドの髪は後で一つに結ばれていて、ランプの明かりがすぐれない彼女の顔色と目の暗さを際立たせていた。彼女はキャラコ織の部屋着とショールをまとっていた。

「何をお望みですか？」長い間泣いていたためか、澄んだ声で彼女は尋ねた。

「何か役に立てることがないかお尋ねなのよ」と年配の方の女性がいった。

ヒックス夫人は肩越しに彼女が今出て来たばかりの部屋に目をやった。「あの子をご覧になる？」ささやくように彼女はいった。

「ルーシー！」ホーナーさんは叫んだ。

私はまっすぐヒックス夫人の方へ歩いて行った。彼女は振り返って小さなベッドの方に向かった。高くかざしたランプの明かりが、白い生地で覆われた小さな像を優しく照らしていた。少年の短かかった美しさは、頭に巻かれた包帯によっても失われることはなかった。黙ったままているのは容易なことだったが、私がそうしたように、沈黙を破ることもまた容易なことだった。「とてもかわいいお子さんですね」と私はいった。

「ええ、とてもかわいい子でした。黒い目をしていました。お気づきだったかどうかわかりませんが」

「いいえ、気づきませんでした」と私はいった。「お葬式はいつですか？」

「明後日です。検死はしなくてもいいそうです」

「ビンナムが話をしておいたのです」と私はいった。それから彼の申し出のことを考えながらしばらく黙っていた。

しかしヒックス夫人は私の気持ちを察していった。「もし参列していただけるのであれば、是非いらして下さい。——お友だちも是非」

「ビンナムはお許しをもらってくるように私にいったのです。彼のためにお話しておきたいことがたくさんありますが」と私は付け加えた。「やめておきます。彼自身の問題ですから」

その若い女性は深く暗い目で私を見た。「あの方のこと心からお気の毒に思いますわ」両手

を胸に当てながら彼女はいった。「私よりあの方の方がお辛いでしょ」

「二つは別々の悲しみではありません」私は答えた。「二つに分けられるものではないでしょう。お二人で耐えていかなければならないものです。ビンアムは賢くていい奴です」私は続けた。「二人で楽しいことをたくさんしました。どうか彼には辛くあたらないで下さい！」私は叫んだ。

「どうして私が辛くあたれるのでしょうか？」広げた両腕を降ろしながら彼女は問い返した。その腕の動きには弱々しさと孤独感が深く表されていたので、込み上げてきた哀れみの中で彼女の問いに答えようとする力が抑えられ、私は黙って立ち去った。

翌日、ビンアムと町に出かけたが、葬儀に間に合うよう三日目に戻った。二人の女性の他には、私たちと慎ましく口数の少ない村の牧師を除いて誰も参列していなかった。牧師は馬車で二人の女性に付き添って墓地まで行ったが、ビンアムと私は歩いて行った。私たちが墓地から立ち去ろうとしたとき、ビンアムがヒックス夫人の方に歩み寄っていくのが見えた。二人は新しく掘り返された土のそばで立ち話をしていた。その間、私と牧師はホーナーさんが馬車に乗るのに手を貸していた。彼女が馬車に乗り込んだ後、私は牧師と月並な挨拶を交わし扉のところでぐずぐずしていた。しばらくするとヒックス夫人がビンアムの腕に寄りかかりながら私たちの方にやってきた。「マーガレット、ビンアムさんと私はもう少しここにあります。後でビンアムさんに家まで送っていただきます」こういいながら、彼女は牧師の方を振り向いて手を差し出した。「ブランドさん、本当にお世話になりました」

私は半ば問い詰めるように半ば思いやるように彼の方にちらっと目をやった。彼は私の手を取って、私の思いやりには手を握ることによって、私の問いにはことばで答えた。「もしまだ今日の午後町に戻るつもりでいるなら、僕を待たなくていいよ。船の時間に間に合わないかもしれないから」

もちろん私はすぐに町に戻った。次にビンアムに会ったときは十日ほど経っていたが、仕事に没頭していたのでほとんど時間の経過を感じなかった。ある朝、彼が私の仕事場に現れた。

「君はB——にはいないものと思っていたよ」

「そうだよ。旅行してたんだ。君が帰った次の日に帰ってきたんだが、宿に戻るとボルティモアの弁護士から手紙が来ていて、そこにある僕の持ち物を少し売るようにいつてきたので、それを口実にボルティモアまで行ってきたのさ。何でもいいから何かする必要があったのさ。でもボルティモアに着いても連絡してきた人物に会いもせず、ワシントンまで足を伸ばして、三六時間も歩き回ったあげく帰って来たんだ」

彼は腕を私のデスクに置き、手で頭を支えながらとても疲れた様子で立ち上がった。

「えらく疲れているみたいだね」

「寝てないんだ。あの女性とあんな話をするなんて！」

「あまりいい話にならなかったのなら同情するよ」

「良かったとも思うし悪かったとも思う。彼女は子どものことを話したんだ」

「そのことについて話ができるようになったのは彼女にはいいことだ」

「厳密にいうと話ができるというわけじゃないんだ。最初は落ち着いて話し始めたんだが、すぐに泣き崩れちゃって」

「それから彼女に会ったのか？」

「次の日に訪ねて行って、町に出ていくことを告げ、何かできることがないか尋ねたさ。でも彼女はまったく閉じこもっているように見えた。困っていることは何もありますと答えたよ」

「彼女はどんなタイプの女性なんだ？心の内をよく打ち明けるとか？」

「まさか！彼女が考えていることなんてわからないよ！」ビンアムはいくぶん感情的にいった。「でも彼女はとても魅力的な女性だ」と彼は付け加えた。

「とてもきれいだ」

「そう。とてもきれいだ。年齢からいってもお嬢さんといつていいくらいの年齢だ。それに、彼女の考えでは彼女はどこにでもいる『普通の人』なのさ」

「君に対する彼女の率直な振る舞いを見ているととても立派だと思う」私はいった。

「じゃあ、気を悪くしてないんだね？」

「気を悪くする？大いに満足しているよ」

「もし僕が彼女を見たように君も見たとしたら、彼女の振る舞いは君の関心を引いたと思うのだが。あれは彼女の無邪気さの表れなのかそれとも思慮深さの表れなのか判断に困っているのだ。もちろん、それが十日前なら美しい衝動の表れではないと考えるなんて馬鹿げているが。明日もう一度B——へいってみようと思う」

私はビンアムに彼女のもとを訪ねて新たな印象を持ち帰ってくれる時間を与えたが、三日が過ぎても彼が現れないので、彼の宿を訪ねてみた。彼はまだ町に帰っていなかった。五日目に彼は私の職場に再び現れた。

「僕はずっとB——にいたんだ。彼女とも何度か会ったよ」彼はいった。

「どうだった？」

「元気そうだ。彼女の素晴らしい良識に大いに心を打たれたよ。精神の問題について、それとも心の問題というべきかな、彼女は天使のようなところがあるというか、女性らしさというものを持ち合わせているんだ。まったく申し分ないよ」

「彼女は落ち着いているのかい？」

「大丈夫。彼女の振る舞いほど純真で落ち着いたものは想像できないさ。彼女は自然と僕に我を忘れさせてくれるのだ。僕たちの話が亡くなった子どものことで影響されるのは仕方がないさ。しかし、そのことで僕たちの話が制限されるわけでもなければ、それが障害になる

わけでもない。彼女には信仰心があり、自然に振舞う余裕があるのだ」

彼は疲れたように見え、彼が抱えている問題に動揺していたが、話をしている間、彼の目は純粹な輝きを帯び、声は新鮮な調子を響かせているような気がした。要するに、どこにそれを感じ、どのようにそれを突き止めたのかはわからないが、彼が何かを隠しているような気がしたのである。視線を落とし、杖で絨毯の鉋を突つきながら彼は座っていた。彼の口もとにかすかな微笑——六ヶ月経てばはっきりと表れるであろう微笑——の兆しを見た。

「ジョージ、僕はあることを思いついた」と私はいった。

彼は顔を上げた。「何だね、それは？」

「君は恋をしている」

彼は急に顔をしかめて一瞬目をこらした。「誰をだね？」彼は聞いた。

「ヒックスさんだよ」

彼は顔をしかめたが、それは微笑むのと同じだった。彼は立ち上がった。顔色が失せ、すべての色が目に集中した。

「間違っていたのならあやまるよ」私はいった。

青白かった顔色が再び赤くなった。「許しを請うのは僕じゃない」彼は叫んだ。そして苦々しそうに付け加えた。「何とでも好きなことをいうがいいが、彼女にあやまるんだ！」

私は不当な非難に腹を立てた。「僕は彼女には何もしていない！」そして、自分はまったくの真実を述べているのだという勝利感を感じながら「彼女が君に恋をしているといったんじゃないんだ」といった。

「チャールズ、君は何という恐ろしいことを想像するんだ！」ビンアムは叫んだ。

「自分の想像力の責任はとれないね」

「こりゃまいったね。いっとくけど、僕がとれるわけがないからね」ビンアムは激しい口調でいった。「それがなくても僕には十分だからね」

「ジョージ」少し考えてから私はいった。「もし僕が君に何か無礼なことをいったのなら、悪かった点は改めるよ。しかし、僕は自分に恥じるようなことは何もしていないし、事実をいったのだと思う。君の動揺がそれを示しているじゃないか。軽率だったかもしれないが、それが事実なら僕が無関心でいるわけにはいかないことは君にもわかるだろう」

「事実、事実って、いったい何についての事実なんだ？」

「ヒックスさんのことが好きではないのか？男らしく認めたまえ」

「男らしくだと！けだもののようにだろ。もう彼女には十分迷惑をかけたじゃないか？」

「十分かけたと思うがね」

「彼女の単純な喜びを苦しみに変えたじゃないか？」

「そのとおりだ」

「そして今度は、僕が彼女を愛していると言って彼女を侮辱しろというのか？」

「僕は君に何もいって欲しくないさ。君が彼女に何といおうとそれは君の問題さ。そうだろう、ジョージ。この世界の他の誰も関係ないのと同じように僕にも関係ないんだ」

額にしわを寄せて杖を握りながらビンナムは立って聞いていた。埃っぽい窓際に歩いていき、大勢の人を通りに眺めながらしばらくじっとしていた。それから振り返って、私の方へやってきた。突然立ち止まった。「そうだ。彼女に恋をしているのだと思う」彼はいった。

私の心の泉が掻き立てられた。「ジョージ、ヒックスさんについての僕の短い印象と君のものを考え合わせると、それはまったく自然なことだと思うが」

私たちが厳粛な事実を祝福したのはこの単純なことばだった。どちらも口に出してはいわなかったが、一回目の話としてはこの件について十分な成果があったように思えた。

このやりとりがあった数日後の夕方、私はビンナムの宿を訪ねた。どこにいるのかは不明であったが、ビンナムは町を出ていると使用人が教えてくれた。しかし、そこを立ち去ろうと振り向いたとき、馬が止まって、目的の人物が旅行鞆をたずさえて馬から降りた。私は歩いて行ってガス灯の下で彼を迎えた。

「一緒に入ってもいいかい？それとも帰ろうか？」私は尋ねた。

「入れよ」と彼はいった。

「話があるんだ。B——に行ってたんだよ」使用人が私たちを居間に残して出ていったとき、彼は再び話し始めた。彼の調子には告白じみたところはまったくなかった。もちろん、私は聴聞司祭として彼の話を聞いたわけではない。

「それで、われわれの友人はどんな具合だい？」私はいった。

「われわれの友人……」ビンナムは答えた。「煙草でもどうだ？」

「いや、要らない」

「そのわれわれの友人だが……ああ、チャールズ、長い話なんだ」

「面白い話ならかまわないさ」

「ある程度痛ましい話ともいえるのだ。どうしようもない低俗な感情と出くわすのは苦痛だよ」

私は混乱した。「それが君の運命だったのか？」

「ヒックスさんをまったく困った状態にするのが僕の運命なのさ。一言でいうと、ホーナーさんが僕と彼女との間の、彼女のことばを借りれば、『尋常ではない仲睦まじさ』には断固として我慢できないというのさ。ヒックスさんは、当然だと思うが、ホーナーさんが彼女の行動についてあれこれいうことに腹を立てているんだ。そしてとうとう彼女がホーナーさんの家を出いくことになったのさ」

「頼れるような友だちがいるのか？」

「夫の親類以外にはいないよ。でも彼らはとても貧しいし、彼女も彼らに頼み事をする気にはならないだろう」

「彼女はどこにいるんだい？」

「町にいるよ。今日の午後一緒に来たんだ。彼女が以前利用していた宿が幸い空いていたので一緒にいったのさ」

「B——を出て来たことを後悔しなければいいがね。悲しい思い出と別れるのだから」

「そうだね。でも町に来てその悲しい思い出を新たにすることもあるんだ」

「なぜそういうことになるんだ？」

「なぜって、それは」彼の声は少し震えていた。「彼女はまったく無一文なんだ」

「何か収入の見込みはないのかい？」

「一年に一〇〇ドルぐらいだと思うが……まったくないより悪い」

「何か役に立つような技術か才能は？」

「簡単な針仕事か何かできるだけだと思う。すばらしい女性なのに。何という世の中だ！」

「彼女がそういったのか？」私は尋ねた。

「彼女が？いや彼女は何もいわないよ。彼女はすべてが正しい方向に向かっていると思っているんだ。多分その通りさ。ただこれ以上望むものは何もないっていうわけじゃないがね」

「ところで」少し間を置いていった。「ヒックスさんに会えるだろうか？彼女は私に会ってくれると思うかい？」

ビンアムは一瞬鋭く私を見た。「多分ね。やってみたら」

「好奇心で会いたいわけじゃなくて……」私は再び続けた。

「好奇心じゃなくて？」

「その、つまり、彼女にもう一度会いたいのさ」

ビンアムはヒックスさんの住所を教えてくれた。そして二、三日のうちに私は彼女のもとを訪れた。私をこういう行動に掻き立てた衝動にそれらしい名前をつけるのはやめておくと、その大部分は好意と礼儀で占められていたと断言してもいいと思う。ヒックスさんは閑静な裏通りにある質素で小さな家に居を構えていた。名前を告げると（彼女が使用していると思われる）心地の良い居間に通され、そこで彼女の来るのを待った。彼女の出迎えは簡素で心のこもったものであった。少し感謝の気持ちがこめられていないわけではなかった。彼女は、私ができるだけの思いやりと善意をいだいていることはわかっていたが、忙しい人間であることもわかっていたので、二度と会うことはできないだろうと思っていた。ビンアムが良識と呼ぶ彼女の惜しみのない魅力に気づくのにそんなに時間はかからなかった。彼女の良識は確かにそこに存在したが、それはその場にふさわしく豊かだった。時間が経つにつれて、私は、しなければならないことはよくわきまえ、しかし、それがもたらす恩恵には極めて無関心でいられるそのような素晴らしい魅力がこんなにも控え目に用いられるのを見たことがないように思えた。彼女があまり想像力豊かなタイプではないことは明らかだった。彼女の話は平凡で、彼女の振る舞いも直接的で洗練されたものではなかった。しかし、こういった限

界があるにもかかわらず、彼女は言いくるめられたり、惑わされたり、欺かれたりするようなタイプではなかった。静かに会話を交しながらこの甘美な安心感の中に私が感じ取った満足感！それがいかに彼女の孤独と貧困を和らげ、彼女の若さと美しさに耀きを加えたことか！少なくともそれは可能性として彼女を世慣れた女性にしていた。それは、どれだけの長きにわたっているのか私にはわからないが、彼女が苦しみ絶望し自立してこなければならなかったことの結果、つまり、落ち着きであったり知恵であったり、そしてある程度社会を経験することで身につく機知、そういったことを期待させるものであった。それゆえ、どのようなつもりで彼女の前に現われたにしろ、彼女と同じ立場の者として話をせずにはいられなかったし、彼女の苦悩をまったくの謎そのものとして見る以外になかった。実際、私たちはそのことについてはほとんど触れなかったし、ビンアムの苦しい立場については遠回しにそれとなく触れる程度だった。ヒックスさんがあまり話さなかったことについてはある意味残念だったことは否定しないでおこう。私と彼女の間にはとても打ち解けた信頼感があったのは確かだが、その信頼感が柔軟に解釈されることを半ば望んで会いにきたのだった。しかしその信頼感は気づかれさえしなかったし、相談相手や力になりたいという私の漠然とした意図は理解されないうままだった。世の中についての視野が広がったような印象とともにその場を立ち去ったが、私の気持ちは、年金で暮らす一人の女性を少しも安心させることはできなかった。

ヒックスさんがまたお越し下さいといわれたので、二週間後、私は再び訪ねることにした。その間、私はビンアムにも何回か会った。もちろん彼は私の彼女についての印象に大変興味を持った。自分が彼女の素晴らしさを1にするより私がそうするのを聞く方が彼にとっては嬉しいようだった。ヒックスさんの客間を二度目に訪問したとき、暖炉の前にビンアムが立っていた。ソファに座って聞いているヒックスさんと何か激しいやりとりがあったようだった。私が入り口に姿を現すとビンアムがもどかしそうにこちらを見た。ヒックスさんはできる限りの落ち着きとともに私を出迎えてくれた。私はタイミングの悪さを感じたが、引き返すわけにもいかなかった。ビンアムは暖炉の前に立ったままで、困ったような様子と嬉しそうな様子との間で——と私は思ったのだが——どうしたらよいか決心がつかないかのように、機械的に私に手を差し出した。私が何か重大な局面の邪魔をしたことは確かだったが、私がお詫びの言葉を発する前にヒックスさんは微妙な感情に促されて急いで次のようにいった。

「ビンアムさんは私に講義をして下さっていたのよ」彼女はいった。彼女の口調にはかすかに苦々しさを感じさせるものがあった。「聴講生が一人増えてお喜びになっているに違いないわ」

「いいや」ビンアムがいった。「チャールズは人の話を聞くより自分が話す方が得意なんだ。君は一つじゃなくて二つの講義を聴けるんだよ」彼はにこりともしないでこう切り返した。

「ところでテーマは何だい？それを知るまでは僕は話もしないし聴きもしないよ」と私はい

った。

ビンアムは手を私の腕に置き、ヒックスさんに向かっていった。「彼は世間の代表だ。君は世間を恐れているんだ。ほら、世間に訴えてみるといい」

彼女は額にしわを寄せ苦痛に顔を歪めてしばらく黙っていた。それから半ば微笑んで私の方を向いた。「あなたが世間を代表しているとは思えませんわ。あなたはあまりにもいい方ですもの」

「彼女はえらく君を持ち上げてるね」ビンアムはいった。「ヒックスさん、君は彼をだめにしちゃうよ」

彼女は一瞬ビンアムから私の方に視線を移した。遠くを照らすような灯りが彼女の目の中で光り、それが彼女の口元に浮かんだかすかに皮肉な微笑みを汚れなきものにした。彼女はいった。「ああ、あなたたち男性は！何と賢く、何と思慮深いのでしょうか！」彼女の視線は最後にビンアムに落ち着いた。しかし、短い沈黙の後、私に手を差し出しながら彼女は私に目を向けた。彼女は続けた。「ビンアムさんはあなたに私たちの相談相手になっていただきたいのですわ。彼のお友達は当然私のお友達でもありますから。彼が私に彼の妻となるようお申し出になられたということを知ればあなたは驚かれるでしょうか？」

「お答えになられたのですか？」私は尋ねた。

「あなたがお越しになられたとき、彼はちょうど私に答を出すよう望まれていたのです。彼は、私が男性の考えにとっても恐怖感を持っていると思っておられます。そして、そのことについてとても難しいことをおっしゃいました。しかし、そういったことは結局このこととはほとんど関係がないのです。世間はビンアム氏がヒックス夫人と結婚するべきかということには関心を持つかもしれませんが、ヒックス夫人がビンアム氏と結婚するかどうかにはほとんど関心がないのです。私にとってはあなたが世間なのです。あなた以外は誰も知らないのです」一貫性のない美しさでこう叫ぶと求婚者の方に振り向き両手を差し出した。彼はその手を取った。

一気に語られたこれらのことばによって形を与えられた凝縮した力、つまり、情熱、思慮、経験の量をどのように表現すればいいのかわからない。それらのことばは真剣で知的な選択に基づく簡潔な発言であった。そういう立派な発言であったので、審判のために集まった社会の最も優れた人たちの集まりでさえ敬意を払わずにはいられなかったであろう。正直なビンアムがいったことや私がいったことは取るに足らないことである。次のような極度に劇的な事実こそ私の物語の相応しい結末がある。この豊かに才能に満ち溢れた女性は、息子との死別の深奥から——孤独と哀れみから——彼女を愛するのと同じほど深く彼女を傷つけた男の情熱に触れて現れ出たのである。この結末では涙を流すわけにも微笑むわけにもいかないと読者の皆様は結論づけられると思う。私の物語は悲劇でもない喜劇でもない純粋な一つの散文なのである。

六ヶ月後、ビンアムは結婚した。本当に幸せな結婚式であった。女性として最も美しい時期を迎え、唯一の例外である彼女自身を除けば、ビンアム夫人は私の知っている最も魅力的な女性である。あなたの貴重な良識はあなたを美しいだけでなく最も幸せな女性にもしたのだとしばしば私は彼女にいつてきた。彼女は献身的な妻になったが、二度と母親にはならなかった。時折やってくる洞察の瞬間に、彼女の運命におけるこの部分は、公正という素晴らしい原則への精妙な賛辞の表れのように思われた。彼女が献身的な妻になったと発言することで、私がビンアムのその後の物語を書いたように思われるかもしれない。しかし、彼の若き日の友人、彼の青春時代の仲間、そして彼の夢の共同参画者として、彼のためにひとこと付け加えておきたい。どういうひとことにするべきだろうか？彼は本当に墮落を寄せ付けない魂の持ち主であり、相変わらずの哲学者である。彼はたくましくなった。